

第132回 令和7年11月27日（木）

「魚を与えるより釣り方を教えよ。」

これは単に一時的な助けを与えるよりも、問題を根本的に解決し、自立できる方法を教えることの方が重要である、という教訓的な意味合いを持つ言葉です。

例えば、困っている人に魚を与える（直接的な救済をする）と、その時点でお腹は満たされますが、それだけでは将来的にまた魚が必要な状況になります。一方で、魚の釣り方を教える（問題を解決する能力や技術を教える）ことで、その人は自力で魚を得る方法を身につけ、継続的に自分の力で食べていくことができるようになるのです。

この考え方は、教育や支援の場面でよく引用され、ただ一時的に問題を解決するのではなく、相手が自立できる力をつけることの重要性を表しています。教育の場では、単に答えを教えるのではなく、考える力や問題解決能力を育むことを意味します。

福祉や援助の分野では、単に物質的な支援をするより、持続可能な生活を支えるスキルや手段を教えることを指します。

具体例としては直接的な支援（魚を与える場合）＝（困っている人にお金や食料を渡して一時的な問題を解決する。）よりも持続可能な支援（釣り方を教える場合）＝（技術や知識を提供して、その人が収入を得て、自立した生活を送る方法を築けるようにする。）

この言葉は、短期的な救済ではなく、長期的な成長や自立を促す重要性を説いた教訓として、幅広い分野で使用されています。

教えすぎてしまう原因は、相手のことを思うばかりについつい熱が入ってしまう場合がありますが、自分に知識があることを言わずにいられない心理もあります。自分のテリトリーの話とされると黙っていられない人は「私はこんなに知っている」ということを黙っておけない人です。

そのような人は自分に自信を持てていません。よく小さい子が「私も知っている」と言って自分の番ではないのに手を挙げて声を出そうとすることがあります。自分に知識があることを周囲に黙っていられない、最初は感心されますが、そのうちうるさがられてしまいます。

自立するまで待つことは一見放任しているように見られがちですが、本当に相手のことを考えているならば黙って見守る時間も大事です。

大きな成長は自分の頭で考えるからこそ実現します。